三田市有馬富士自然学習センターとの一体的運営

人材交流とノウハウ共有で施設の可能性を最大限引き出す

三田市有馬富士自然学習センターは、県立有馬富士公園内に位置する学習施設で、公園の開園とともに、2001年4月に開館しました。県立有馬富士公園のハード・ソフトや自然学習センターの設計には、じつはひとはくが深く関わっており、自然学習センターの常設展示や教育普及プログラムは、ひとはくの研究員が三田市職員といっしょに考案したものです。それから15年が経過した2016年より、自然学習センターのプログラム運営は、三田市からの事業委託という形で、ひとはくが担うことになりました。

自然学習センターでは、2010年度から指定管理者制度が導入され、それに伴い市の直営部分は順次縮小、2010年度以降現場の職員は学習指導員（三田市非常勤嘱託員）のみとなっていました。2005年度に年間18万人近くあった来館者数は、以後の10年間でピーク時の6割ほどまで減少し、プログラムの質の向上が施設の大きな課題となりました。

支援の方法はいくつか考えられましたが、設立時の経緯や近隣に位置することを鑑み、相乗効果を期待してひとはくと一体的なプログラム運営を行うことにしました。県立で多数の専門家を擁するひとはくと、フィールドを生かし地域住民に密着した活動に力を入れる三田市立の学習センターが一体化することで、三田市民のみならず広く県民にとっても、利用者の多様なニーズに応じた幅広い学習機会が確保されます。

1. 開館20周年記念式典にて、森哲男三田市長（左）と中瀬勲館長（右）（2021年10月23日） 2. 常設展示の目玉となっているジャンボクワガタ。常設展示にはひとはくが深く関わりました 3. 0から3歳を対象とした体験型プログラム「こつぶっこ」。平日にゆとりを持って楽しめます 4. 小学校4から6年生を対象とし、年間を通した活動を行うプログラム「ジュニアスタッフ」

人と自然の会

これからチャレンジしたいアイディアも盛りだくさん！

特定非営利法人人と自然の会は、会員数50名以上を有し、「カワセミの会」「里山クラブ」「花工房」など11のサークルがあります。今回は一部のメンバーが現在考えている5つのアイディアを紹介します。1つ目は障害者対応のプログラムをひとはくと連携して実施すること。植物の香り、バードウオッチング、石ころアートなど活用できると考えています。健常者も一緒に楽しめるでしょう。2つ目は、「食べる」「触る」といった体験です。ヤブカンゾウ、ヨモギなどたくさん食べることのできる植物があります。すでに夏には生き物とふれあおうとイモリ、カエル、メダカなどの卵を触らせています。帰るときには、触れなかった子が握れるようになります。子供たちがとても楽しそうで、このような自然と親しむきっかけづくりが会の役割だと実感します。3つ目は、里山クラブで、研究員と協力してひとはくのある深田公園で雑木林の植生調査をして、新緑を楽しむコース、紅葉を楽しむコースなどをつくろうとしています。深田公園を活用したいという思いがあります。4つ目は、どこの家にもある余った食器で多肉植物を飾る講座です。多肉植物の鉢に穴は必要ないので食器はちょうど良いのです。5つ目は、ひとはく30周年を祝って、ダリアの花びらなどで蝶を描きたいと考えています。ひとはくの建物のガラスウォールに面する深田公園の水面に花びらで蝶の片方の羽を描けば建物に写って蝶が完成するというものです。このようにメンバー同士で話し合っていると、様々なアイディアが出てきます。会は、身近な環境から楽しめる素材を見つけ出して発信を続けます。

1. イベント「生き物とふれあおう」 2. 里山クラブ 深田公園での植生調査

恐竜化石関連ボランティアとの連携

発掘調査、化石剖出、教育普及に携わる人材の育成

恐竜化石事業におけるボランティアとの協働は2006年の丹波市上滝における恐竜化石の発見を契機に始まりました。当時、大規模な発掘調査が計画されましたが、限られた期間に最大限の成果を得るためには多くの人の助力が必要とされました。そこで、地域の方を中心にボランティアが募集され、その参画と協働のもと調査が実施されました。同地における大規模発掘調査は現在中断していますが、ボランティアに参加した一部の有志は同好会やグループを結成し、化石に関係する調査活動や地方創生活動、またひとはくの地域研究員として普及教育活動に携わっています。

そして2015年には上滝や川代トンネル岩砕より新たな恐竜化石が発見されました。この他にも篠山層群の複数ヵ所の地点から化石が発見されており、継続的な調査を実施する必要があります。また産出化石は優に4万点をこえ、研究や資料の適切な保全管理のためにはその整理・剖出作業が必要不可欠です。そこでひとはくでは近年新たなボランティア育成事業を立ち上げ、これまでの体制を見直し、発掘調査、化石剖出、教育普及に携わるボランティアを募集し人材を育成することで、各種事業の推進に取り組んでいます。ひとはくとボランティアが連携・協力し、ボランティアが主体的に活動できる環境を整え協働することで、新たな資料や学術成果を得ることができ、またそれらは教育普及や地方創生活動に活かされると考えます。ひとはくは、今後もこの連携を大切に博物館活動に取り組んでいきます。

1. 卵化石発掘調査の様子（発掘調査ボランティア） 2. 川代トンネル岩砕調査の様子（発掘調査ボランティア） 3. 発掘体験会の様子（教育普及ボランティア） 4. 技師の技術指導の様子（剖出ボランティア）

施設連携によるジーンバンク事業の推進

絶滅が危惧される野生植物を次代に継承する

現在、日本に自生する維管束植物約7000種のうち約25%が絶滅のおそれがあるとされ、環境省のレッドリストに掲載されています。こうした危機にある野生植物を保全するため、ひとはくでは開館以降「ジーンバンク事業」を実施してきました。「ジーンファーム」はその中核施設で、絶滅危惧植物等の個体群系統保存、危険回避、緊急避難など、域外保全を目的とした野生植物の栽培・維持を行っています。しかし、ひとはくだけで多種多様な野生植物を保全していくのには限界があります。そこで、姫路市立手柄山温室植物園など県内の施設や、地域で調査・保全活動をされている方々と連携をとりながら、事業の充実化を図っています。他施設と連携し栽培情報や生育環境に関する情報を共有することで、より多くの種類の植物を安定的に育成できるだけでなく、種内の遺伝的多様性にも配慮した域外保全を進めていくことが可能になります。

また、ひとはくでは「ジーンファーム」での植物の栽培・維持と並行し、館内では種子保存も進めてきました。2008年から環境省と全国の植物園による種子保存事業が始まりましたが、産地や個体数の少なさから特に重要と考えられる種については、その種子の長期保存を図るため、事業の拠点施設である新宿御苑に種子を送付しています。野生植物の効果的な域外保全、そして自生地での域内保全に向け、今後も関係施設との連携を進め、地域の方々の協力を得ながらジーンバンク事業を展開していきます。

1. ジーンファームの全景 2. 遮光ハウスにおける植物の栽培状況 3. 絶滅危惧植物ウンランの系統保存 4. ひとはく館内における種子の冷蔵保存状況